

年号が変わる頃

中 島 義 一

長かった昭和が終った。大正の末年に生れた私は文字通り昭和の年号とともに生きてきたので感慨は大きいものがある。特に昭和の年数と自分の年齢が一致しているというのは理屈抜きで好い気持ちだった。戦後になって数え年を満年齢に改めることになった時、余計なことをしてくれると面白くなかった。これではイコールではなく1引かなければ自分の年にならない。しかも誕生日になったらという但し書きまでつく。

大正が終った時は物心ついていなかったから今回は初めての経験で、そして恐らくは再び経験することはないだろう。この前に年号が変わった時すなわち大正の終り、更に明治が終った時のことを知りたいと思った。それも一般の世相は当時の新聞を見ればわかるが、もっと身近な、地理学界の先輩方がどうされたか見てみたい。

まずは日本地理学会から。地理学評論は大正14年に創刊。大正は15年、そして12月25日に終る。昭和元年は1週間足らず、元旦は昭和2年である。地理評の3巻1号の奥付には大正15年12月25日印刷、大正16年1月1日発行になっている。実在しない大正16年が出てくるわけだが、これはむしろきちっと定時刊行をしていたことを証明するものと言えよう。もとよりこの号は平常と何らかはったことはない。次の3巻2号では表紙（表裏とも）に黒枠がつく。巻頭に追悼文を掲げ、また「会長をして参内せしめ奉悼表を奉り謹で天機を奉伺せしめた」とある。

一方地球学団の地球も7巻2号の表紙（裏表紙とも）が黒枠つきとなるが、追悼文はない。当時の学会は現今のように組織立ったものではなく、日本地理学会は山崎直方博士、地球学団は小川琢治博士が数人の門下生の協力を得て運営するというものであったらしい。このような場合に会長の考え方や性格が強く出てくると見てよい。

明治末については日本歴史地理学会（今の歴史地理学会とは別の会）の歴史地理を見してみる。20巻2号で明治が終る。この雑誌は色刷の表紙だったが次の号では赤や青などを止めて黒とグレイに代えられる。巻頭に奉悼の辞が掲げられ、目次が黒枠つき、また急起稿されたと思われる「先帝陛下の御事歴」「明治初年の先帝陛下」「御陵地に撰定せられたる桃山」の記事が掲げられる。

以上のほかにも地理関係の雑誌はあるがこの目的には使えなかった。役に立ったのは私が個人で所有している分だけで、大学図書館所蔵の雑誌は巻ごとに製本し、表紙ははずしてしまっているので黒枠の有無などを知り得ないからである。

昭和最初の地理評（3巻2号）の執筆者の中で平成になった時点で唯一の生存者は飯本信之氏だったが、6月12日、94才の天寿を終えられた。いうまでもなく、女高師・お茶の水女子大に永く在職され、地理学教室の基礎を築かれた方である。地球の方（7巻2号）では佐々木清治氏（静岡大学名誉教授）が今も健在である。8月に静岡大学で開かれた日本地理教育学会大会で久しぶりに目に掛ったが、90才の高令にもかかわらず元気そのもの、1899年生れの氏は3世紀にわたって生きられることであろう。

歴史地理の20巻2号には明治期最後の東大・京大の卒業生氏名と卒論題目がでている。東大に地理学科ができるのは大正期に入ってからであるが、京大では明治43年に第1回卒業生を出し、この年すなわち第3回の卒業生として楠田鎮雄・松岡範二の両氏が出ている。楠田氏の卒論は「山岳の研究」、内容については知る由もないが、何とも雄大な題目である。草創の際とて、個別的実証的なものよりは綜説的なものが要求されていたのであろう。

（駒沢大学）